

周産期における母親の子どもへのことばかけの音声特徴の変化

○ 齊藤こずゑ
(國學院大学)

志村洋子
(埼玉大学)

問題: 前言語期の子どもに対しては、大人はことばかけの調整を行い、意味機能や文法構造だけではなく、音声面でも大人への話かけとは変化させる。この大人のことばかけの調整は、個人差や育児経験に依存しない普遍性をもつという見解の一方で、必ずしも文化的普遍性のない結果も見出されている。大人の子どもへのことばかけの調整は、子どもの言語発達に影響を与える環境言語として重要な意味を持つ。そこで、同一文化内でも、出産や育児経験の有無が、実際に子どもへのことばかけの音声特徴にどのような変化をもたらすのかを調べる。出産1週間前後の短期のタイムスパンでの変化を調べることで、出産経験がことばかけの調整に与える影響を明確にする。ここでは、①出産経験がことばかけに変化をもたらす、②その変化はことばかけの形式や内容特性と関係する、③その変化には共通性と同時に個人差がある、の3点を予測する。

方法: 周産期の母3人(A,B第2子,C1子)の家庭を5時点で(出産予定日の1週間前、出産1週間後、2週間後、3週間後、3か月後)訪問し、4場面の発話を録音する。
①絵本場面: 特定絵本の特定説明文を読む ②定型台詞場面: 形式機能の異なる14種の定型台詞を読む ③対人形会話場面: 抱いている人形相手に自由に話す(3分) ④対子ども会話場面: 産前はお腹に、産後は抱いた乳児相手に自由に話す(3分)。また、訪問した実験者との会話も比較のため録音する。

対照のため女子大学生3人で同じく①~③場面の発話を録音する。時期は1回目の2週間後に2回目、その1週間後に3回目の計3回である。録音した会話は音声分析によって各種音声特徴を数量化した。

結果: ①個人別に対大人発話及び5回の各場面の発話それぞれについて、ピッチの上下限値を横軸、縦軸と

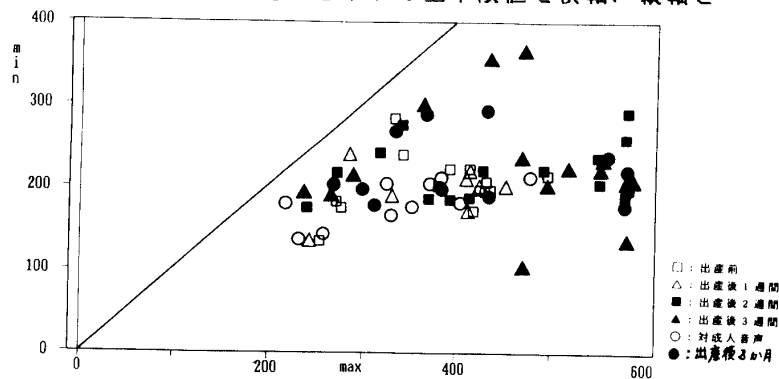


図1 : 母B, 各時期の定型台詞のピッチ上・下限による分布

してプロットした。一例を図1に示した。この図では45度の線に近接する発話ほど音調が平板で、横軸及び高周波数値に近接するほど抑揚の大きい発話である。
②同様に個人、場面別に各発話のピッチの上下限差を棒グラフにし、5回の時点と比較した。
③5回の時点間の変化を見るため、同一発話の比較可能な絵本と定型台詞について、各発話のピッチ上下限差の順位相関を算出し、同様に女子学生の時点間相関も表1に示した。正の相関が高いほど時点間で各発話の抑揚に相対的な変化がなく、相関が低くなるほど時点間で同一発話に相対的に抑揚の変化が生じたことを示す。

考察: 図1等の個人間比較では①同一発話の抑揚分布に個人差があるが、②対大人発話より台詞など子ども向け発話は抑揚が大きく、③個人差はあるが産後のある時点で抑揚増大傾向が生じ、④各場面の発話によって抑揚増大傾向の生ずる時期に差がある、点が共通していた。時点間の変化を順位相関も参照して対照の女子大生と比較すると、女子大生では⑤抑揚増大傾向の生じる明確な時点が無い、⑥相関がないという意味で抑揚変化があっても変化の方向が抑揚縮小など逆方向の場合があるなど、単に各場面の発話の繰り返しだけによって抑揚増大傾向が生じることはないことが解った。抑揚増大と各発話の形式や内容特性の関係もあり、全ての発話が同様の抑揚変化を示すのではないことが解った。(本研究の一部は平成5年度文部省科学研究費補助金重点領域研究「認知・言語の成立」の補助を受けた)

表1 絵本、定型台詞場面の発話のピッチ上下限差に関する時点間の順位相関係数

		母A	母B	母C
絵本	産前VS.産後1	.347	.089	.697
	産前VS.産後2	.283	.375	.263
	産前VS.産後3	.117	.542	.363
	産前VS.産後4	.118	.017	.326
定型台詞	産前VS.産後1	.829	-.040	.738
	産前VS.産後2	.725	.862	.695
	産前VS.産後3	.785	.743	.769
	産前VS.産後4	.490	.870	.855
		学生Y	学生C	学生O
絵本	1回VS.2回	.856	.573	.523
	1回VS.3回	.872	.517	.281
定型台詞	1回VS.2回	.908	.868	.930
	1回VS.3回	.719	.714	.714